

2-1 倉石武四郎致松浦嘉三郎書簡（翻刻）

- 一、昭和四年端午節
 - 二、昭和四年六月七日
 - 三、昭和四年六月十三日
 - 四、昭和四年六月二十三日
 - 五、昭和四年七月十一日
 - 六、昭和四年七月二十六日
 - 七、昭和四年八月七日
 - 八、昭和四年十月五日
 - 九、昭和四年十一月二十八日
 - 十、昭和五年一月二十四日
- 附一、昭和四年十月九日來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札
- 附二、倉石發往松浦電報
- 附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報
- 附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報

一、昭和四年端午節

敬覆、本月初五發大札敬誦申上候。研究所にて一家の藏書を購置せらるるの案成立致し候由、御同慶の至に御座候。よって早速徐森玉先生¹を訪うて、その帮忙を敦請致し候処、現に鄧家に一批の品あり²、この事李木齋³より秘かに聞けるものにして、外間には全く知れ居らず、その特色は叢書に富むに在る由に候乍ら、南京にも洪家の藏書あり⁴。その目録は或は御在平中に御目にかけてるやも知れず候が、謄寫版の一厚冊たりし。これは徐先生も推薦出来るもの乍ら、現状の如何を詳にせざる由。よってこれらの秘密調査を依頼して、已に其の快諾を得事候。吉左右は暫時御待ち下され度奉願入候。第二案は實は小生が大學に對して勸告したると同一手段にて、原則は極めて賛成に候へども、何等の基礎なくして直に之を實行するときは、麻煩は可忍とするも、書價の上に大差を生ずるは自明の理に有之候間、愚見を以てせば、第一第二案を併用することが最も策の得たるものと存候。比如ここに一家の貨ありて、三萬元にて話纏りなしたるとき、これに一萬元を加へて四萬元として、坊肆等より補入し、研究所の基本藏書とすることに候。何卒御高見相伺度事に存候。次に當方より要求申上度は、先回楊家の覆轍に鑑て⁵、あらかじめ外務當局と周到なる打合せをなしおかれ、臨機の処置に便され度、折角徐氏が價を説好され乍ら、一月も決定し難きことありせば、徐氏の面目に對しても相濟まず候。ついては大体外務省が（東京に對する比例も有之可候）京都研究所の爲に臨時交付す可き費目の最大限を豫め御内報願上度く、然る上にて當方より電報にて結果報告、即刻決定致すことと可相成候。勿論運によりて豫定し難きことにつき、衙門に對し言質をとることは頗る困難ある可く候へども、そこは瀨川老人⁶を如何すると同様の方法にてよろしく出来る筈と存候。なほ送金の方法も決定次第即時に發送できれば申分なきも、若し會計法を楯どりて之に應ぜざると

¹徐森玉（1881-1971）、名は鴻寶、字の森玉で行われることが多い。目録學、版本學に通じ、北京大學圖書館長、北平圖書館採訪部主任、故宮博物院古物館館長などを勤めた。新中國成立後は上海にあって、上海市文物保管委員會主任、上海博物館館長などを歴任した。日本との關係で云えば、東方文化事業總委員會の圖書部主任でもあった。

²恐らくは鄧邦述（1868-1939）の群碧樓藏書を指す。

³李盛鐸（1858-1937）、字は椒微、木齋はその號。江西德化の人。光緒十五年（1889）の殿試において一甲二名の榜眼で進士及第、翰林院編修を授けられた。京師大學堂總辦、出使日本欽差大臣、同ベルギー欽差大臣などを歴任し、革命後は袁世凱總統府政治顧問、參政院參政、農商總長、參議院議長などの要職を歴任した。藏書の富を以て聞こえ、李家三代によって蓄えられた木犀軒藏書は、民國期最大最善のコレクションの一であった。藏書のうち、敦煌寫本が日本に歸した以外、殆どすべてが1939年の末、末子少微により北京大學文學院に賣却された。

⁴南京洪家は不明。

⁵山東聊城の楊氏海源閣藏書を指す。文化事業部では昭和四年五月頃、海源閣藏書の購得を圖ったが成功しなかった。

⁶瀨川淺之進（1862-?）、明治・大正期の外交官。中國各地で勤務し、大正十二年退職時は漢口總領事であった。その後、外務省囑託、對支文化事業委員となり、大正十四年（1925）五月北京に設置された東方文化事業總委員會の總務委員を務めたが、昭和七年（1932）十月に歸國退職した。ちなみにその後の東方文化事業の實務は橋川時雄（1894-1982）が總務委員署理として引き継ぎ、終戦に及んだ。ここに云う「瀨川老人を如何すると同様の方法」が具體的に何を指すかについては不明。

きは、外務方面には秘密にて金子を弄出して速に事を運ばざる可らざるやも知れず、其の辺の御理解は固より（手付金及全額につき）方法等につきても十分御援助相願度候。第二案による追加壹萬元は十分小生には蒐求すべき自信有之、蒐求が壹萬元に満ちたるときに打ちきればよろしく、決して其の額に充たざる様の患は無之候。前便御願致候大學に於ける清人文集の目録は、事茲に至るときもやはり必要は十分に有之、何卒一日も早く惠寄相願度存候。餘力あらば他の部分、即ち經部史部子部及叢書とも、拙速にてよろしく候間、目録陸續調製下され候はば、活動上の便宜之に如き不申候。以上數件は當方より折入りて御依頼申上候。枉げて御允諾の程、奉願上候。先は當用のみ如此に候。

松浦先生文安

武四郎拜
端陽節

二、昭和四年六月七日

敬覆、御歸朝第一信第二信相踵ぎ奉接仕候。研究所も愈々開辨の運に至り申候由、創業の重責を負うて御鞅掌の御事、欣慰の至に奉存候。御照會の書價に就ては、文奎來薰の二家とも或は目下存書なきものも有り〔（ ）を附す〕候へども、大体

	文奎	來薰
十三經注疏 阮刊原刻本		一八〇,〇〇 晚印書品不甚佳有三部
皇清經解續編 初印本		(九〇,〇〇) 近來少
二十四史 竹簡齋本		-(七五,〇〇)
九通 局刊		三〇〇,〇〇 印的平常
漢魏叢書 三十八種木刻本		
影印本		(二一,六〇) 商務印
册府元龜 鮑刻		(一八〇,〇〇~二〇〇,〇〇)
二十二子全書 局刻		二二,〇〇 印的平常
玉函山房輯佚書 湖南刊	三〇,〇〇 平常	二四,〇〇 晚印難看
山東刊	三二,〇〇 平常	
漢學堂叢書		(五〇,〇〇~八〇,〇〇)
(黃氏逸書攷) 增益五十餘種	(豫約六五元 蟬隱廬中國書店等已出版)	
續禮記集說	十六,〇〇	
四庫總目提要 並 簡明目録 廣東小本	三五,〇〇 凡簡明目録を帶ぶるものは初印本たり難し	三三,〇〇 書品不佳
四部叢刊 白紙		(六〇〇,〇〇から五五〇,〇〇)
黃紙		(四五〇,〇〇)
全上古三代秦漢六朝文		(七五,〇〇)
經籍纂詁 原刊	一六,〇〇 帶補遺のもの故初印はなし この書竹紙晚印	二六,〇〇 白紙

學津討原	木刻	五〇〇, 〇〇 鳳禹川舊藏本	四五〇, 〇〇
	影印難覓		(一〇〇, 〇〇?)
五礼通考讀礼通考		一六〇, 〇〇 澗大	一二〇, 〇〇

以上の如くに御座候。この表により直に御賢察ある可しと存候へども、かかる平常の書は晚印書品の不佳なるものはザラに有り候丈に、精印の書を見むることは却て困難なれども、勿論これは實用の目的により特に御選擇とは存上候ども、一面より云へば實用として頻繁に検索さるる丈、最も完好のものを備ふ可き乎とも存じ、殊に此等の書の殆ど全部は大學にも有り候間、當坐としては借閱の便宜も可有く、小生の私見としては四部叢刊の如き甲乙なきもの、黄氏逸書攷の如き新印本を除き、その他は少しく悠くりと善本精印を窮搜して、然る後に奉寄する方針に據られては如何かと存申候。その間の應急処置としては、注疏にても經籍纂詁にても、石印を眞の索引用として備へられ候も一法かと存候。二十四史に就ては塚本君⁷とも相談して、竹簡齋本よりはむしろ殿板影印本を購置されんことを御勸め可申上おき候。殿板そのものを購ふことは本來意義少なき上、一万円の圖書費にては何時購へるやらと存上候。さりとて二十四史と名ざす限り殿板の内容なくしてはこれも相濟まず、よって老石印二種（同文書局、五洲同文書局即涵芬樓本）中、大學に備へつけざる一種の購入を推薦したる所以に候（殿板の行格を變じたるものは更に必要なしと存じ、又五局合刻本を購ふ程ならば、底本たる十七史を購ふ方がましに候様存ぜられ候）。要するに愚見としては、これ又平常の書は何時にても見むれば必ず獲るもの故、強ひて時間を急ぎ書品の不佳なるものを購はるるは、悔を百世に貽す虞あり。もし相當の豫算さへ保留され候はば、この二家をして十分吟味せしめたる上、遅くとも今學年度位にはほぼ選択を了する様に取計ては如何かと存候迄に御座候。御高見御洩らし下され度奉待入候。北京は何と申すも舊書の淵叢なり、時機次第にては再び獲難き程の逸品も舞ひ込むことあり。研究所を離れて大局より京都⁸の學界に望み度は、やはり大學と協力してなる可く重複を避けて一部一本にても多くの書を將來することに有之候。大學方面にて鈴木⁹、小島¹⁰兩先生の協賛を仰ぎ、例の清朝經解隨筆並に集部の精密なる蒐集

⁷塚本善隆（1898-1980）は浄土宗の僧侶にして中國佛教史の研究者。京都の佛教専門學校（現在の佛教大學の前身）、東京の宗教大學（現在の大正大學の前身）を卒業し、さらに京都帝國大學の印度哲學を大正十二年（1923）に、東洋史學を大正十五年（1926）に卒業。昭和四年（1929）五月一日付で東方文化學院京都研究所研究員となり、この當時北京留學中であった。のち京都大學教授、同人文科學研究所長、京都國立博物館長を歴任した。昭和五十二年（1977）日本學士院會員。『塚本善隆著作集』全七卷がある。

⁸日本を抹消、京都に改める。

⁹鈴木虎雄（1878-1963）、京都大學教授、中國文學。昭和十四年（1939）帝國學士院會員。昭和三十六年（1961）文化勲章受章。著作に『支那文學研究』『支那詩論史』『賦史大要』等。漢詩人としても有名で、『豹軒詩鈔』十四卷がある。その舊藏漢籍は京都大學文學部に歸し、鈴木文庫として所藏されている。

¹⁰小島祐馬（1881-1966）は京都大學教授、東洋思想史專攻。文學部長、人文科學研究所（舊人文）初代所長を歴任。昭和二十四年（1949）日本學士院會員。著作に『古代支那研究』『中國の革命思想』『中國の社會思想』等がある。その舊藏書は故郷の高知大學に歸し、小島文庫として保存されている。

を試之度、就ては大學方面の圖書費は有限にもあり、是非後の尻ぬぐひと申すも憚乍ら、後顧の患なき様、研究所方面の御援助乞ひ度ものに存候。なほ御繁忙の折とて御自身には勿論不可能ならんも、何人かを雇して大學に既に購置せる清人の集部に就き（叢刻中のものは必要なし）書名、著者名、卷數、刊刻年の四項（圖書館既製のカードの俣にて更に妨げ無之、原本の調査には不及申）調査せしむる様、御費心下されまじく候や。むしろこれは拙速を尚び申候間、多少の誤脱は敢て意とせざる所に候。案外肝要なる集すら具はらざることあるは豫ねて闕典としたる所、是非此の機に乗じて一氣呵成に事を臧したきものに日夜念願罷居候。諸老先生も愈々御壯康の由、慶賀の至に存居候。御寓居も一乗寺にトせられ候由、林下御快適の趣も兼ねられ候御事と欣羨に不堪申候。當地吉川君¹¹は病後靜養の爲、去る二日發にて歸國され（大阪市天王寺區北山町二七）、塚本君も本日南遷の途に就かれこれは月末再び歸燕の豫定、駒井君¹²も本日歸國。かくて留學生は烏山老¹³を除きては延英社中の同人の之を剩すことと相成申候。北大學院も今月二十二三日頃より暑假に入り可申、この夏こそは小學方面に没頭致度ものに存居候。幸ひ近來支那の青年學者中年學者との交渉も稍々繁く相成り、受益の機會も日に多きを覚え申候 研究所の茶のみ話の資料として、新事實御報知申上候。この程河南にて又もや漢石經の一大塊を發見したる由、即ち後序の一部に係り、曾て徐森玉先生の有にして今國學研究門に歸したるかの後序の一塊に接す可きもの。拓本は天壤間か北京か、ともかく一本あるのみ。原石はなほ河南に在り申候由、二千元位とか風の便りにきき込み申候。

松浦學兄文安

武四郎拜

六月初七

三、昭和四年六月十三日

至急申入候。本日徐森玉先生回拜に見えられ、別紙の如き目録を示され申候。所藏者は天津の陶氏湘に係り、目録にて御覽の如く、あらゆる叢書彙刻全集等を網羅し、宛然彙刻書目を現物にて示したるものの如く、研究所向きとしては殆ど之に如きざる可べく存候。流石に徐先生の推薦だけ有之候。金額は後天徐先生まで通知ある可く、その上にて電報等により速報可申上候。但し陶氏は有名なる愛書家にて、書物の吟味は膏肓に入り、何れも精刻原印に係り、且つ一葉の落頁もなく整備されし上に、木箱まで吟味して造り、之に文字を刻したる入念振りに候間、書價は相當貴きを免れざる可くと存申候。然し永遠の事業としての研究所のその第

¹¹吉川幸次郎（1904-1980）は中國文學者。京都帝國大學文學部卒業後、大學院に進學。この當時北京に留學中であつた。歸國後、東方文化學院京都研究所研究員となり、經學文學研究室主任を務めたが、戦後文學部教授に轉じた。昭和三十九年（1964）日本藝術院會員。『吉川幸次郎全集』全28巻がある。

¹²駒井和愛（1905-1971）、考古學者、東京大學教授。原田淑人とともに中國、朝鮮各地で東亞考古學會主催の發掘調査に従事し、數多くの報告書を殘した。著作に『中國考古學論叢』『中國古鏡の研究』など多數。

¹³烏山喜一（1887-1959）、東洋史學者、京城帝國大學教授。戦後は第四高等學校校長に任じ、繼いで新制富山大學學長を勤めた。著作に『黄河の水』がある。

一石を打ちこまんとする際なれば、百万の疏品を備ふるよりも、この一精藏を基礎とされ候が最も望ましくと存候。就ては外務省の方面極力御運動の上、此の絶好機会を逸せざる様、呉々も奉祈上候。なほこれは彙刻部に係り、その他にも之に類する鉅多の藏書ある趣、金額次第にては更に他にも及び得ることと存候。若しこれ丈の叢刻を備へて其の分類目録を完成されんか、叢刻に悩める學界にとりて一大福音と存候。なほ偶々この中に漏れたるもの、又は新刻にして未だ補入されざるもの等にて、若干心あたりも有之候間、若し前便申上候如く、甲乙兩案併用の事が秘かに乍ら實現出來得るとせば、小生も犬馬の勞を吝まず候。清朝文集經解の單行本とも至急に收購の上、殆んど完全に近き蒐集として我が學界に貽り度と存申候。何分とも極力通過の様、御費心相願候。徐先生も大のりきにて活動されることなれば、其の面子に對しても然る可く奉願入候。若し電報にて價格申上候場合には（歐文にては手紙より早く着きすぎ候故、和文により可申候）、陶氏の要求額にて徐氏の承認されたるもの（これは再び動かし難き故、打價の見込は無之）をそのまま打電可仕（電文の都合にて單位は萬を用ふることと可致、そのつもりにて御判讀願候）小生としてはこれに一万円位を加へて乙案の資金と致度願間罷在候へども、その辺は研究所の輿論に須ちて御返電を待つのみ候。外務省にはなる可く多額の豫算を請求するは最も賢明なる策に非ずやと存事候。申す迄もなくかかる問題は金額と同時に時間も左右すること故、相成る可くは研究所より東京に人を派し、膝詰め談判にかけ至急御決定あり度、支拂の方面につきても充分打合せ相願度存候。若し御決定の電報に接したるときは、小生直に下津の上、詳細に調査を加へて責任を明に致す心算に有之候。賣金は買金に遭遇致候事にて成否は天に在らずして人に在り。これ小生の特に老兄に三度意を致す所以に候（葉德輝の舊藏書中直隸書局にて購へるものは明日大學の爲に何人にも先ちて押へに參る筈に候）。艸々。

松浦先生文安

武四郎拜

六月十三日

四、昭和四年六月二十三日

敬啓、日前和文電報並に拙書奉寄、夙に御電覽のことと存申候。書價商榷のこと、その後徐先生には會上にて拜晤は致候へども、秘事を議するに便ならず、それに北京は吉川塚本兩君てふ雙手を喪ひ、わづかに水野君¹⁴の象胥をつとめる事あるのみに候。小生聊か多事多端、未だ實行に及び不申候。但しそれよりも重要なるは研究所の決心に在りと存候。吉川君の通信にても研究所の指導たる可き華人は人さへあれば礼聘を辞せざる方針の由ながら、小生をして云わしむれば、研究

¹⁴水野清一（1905-1971）は考古學者、京都大學教授。濱田耕作に考古學を學び、京都帝國大學史學科を卒業して、この當時東亞考古學會の留學生として北京滞在中であった。のち東方文化研究所研究員となり、戦後同研究所再編後は京都大學人文科學研究所教授となり、京都大學イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊を組織した。長廣敏雄との共著で『龍門石窟の研究』『雲岡石窟』の大冊を出版した。

所に決心さへあれば人を獲るは難からずと存申候。購書のこと亦如此のみ。次に叢刻類の補遺たる可きものとして、

塩邑志林 二十四本 二百四十元 巴陵方氏功惠舊藏

校礼堂全集 凌廷堪 六本一百二十元

以上兩種の大物の外、陳鍾祥趣園初集 五元 舒白香集 四十元 吳興沈氏子集 五元 愛梅樓叢書 十八元 等おさへおき申候。就中塩邑志林は十日間の期限にて回答致すことに約束致しおき候間、御購求の際は至急和電ぐらゐにても御返信相煩申候。その他中立四子兩京遺編等も手に入る可能性あり。倪濤の六藝之一録も三千元ならば買へさうに有之候。すべて京都へ齎らす可き書籍選択の標準は、陶氏の書を買ふと否とにより大變動有之候点、殊に至急の御決定奉請候。

松浦先生文安

武四郎拜

六月念三

五、昭和四年七月十一日

敬啓、本月初一日付電報並に貴翰何れも拜接申候。何よりも武進陶氏藏書に關し、狩野所長¹⁵はじめ多大の努力を以て購求に尽力され居り候趣、敬承感佩至極に存奉り候。電報拜接と同時に徐森玉先生を訪うて其の意を傳達致し、且つ巷間傳ふる二三の臆説につき之を質し申候処、早速陶氏の令弟心如先生¹⁶を招き、詳に問審せられ候。幸にしてこれらは全く臆説に過ぎず 目録と内容と符合せず云々、或は目録以外のものもある可しとの証言にて、頗る安堵致候。且つ愈々決定の際には同氏の東道にて下津し、詳かに調査を遂ぐる旨約束致しおき候間、將來他に買主ありとするも、小生若くは徐先生に無斷にて讓渡すること絶対に無かる可く、其の點は御放念下され度候。但し當方が一步を踏み出せば一步だけの責任を負ふは當然の事實に係り候につき、決定が一日も速ならんこと切實の至に奉存上候。日本も政變にて政策上の變動若くは事務の滯滞などもあらんかと疑懼のみ申居候。但本件にて狩野所長が老懼を提げて東上せられ候趣は、小生として殊に過意不去の想に堪へ不申候。次に此は小島評議員まで此程申送りたること乍ら、本件に關連し傅沅叔先生¹⁷蒐集の清人文集類が購收の希望あるを知り申候。これは叢書の如

¹⁵狩野直喜(1868-1947)、京都大學教授。肥後熊本の人、字は子温、君山と號した。帝國大學漢學科卒、中國留學中義和團の變に遭い、服部宇之吉とともに日本大使館に籠城したことはよく知られる。明治三十九年(1906)、京都に文科大學が創設されるや教授となり、中國文學・哲學を講じた。退休後、東方文化學院京都研究所の初代所長を務めた。大正十四年(1925)帝國學士院會員。昭和十九年(1944)文化勲章受章。生前の著作に『支那學文叢』『讀書叢餘』があり、没後、講義録等を編集刊行したものに『中國哲學史』『兩漢學術考』『魏晉學術考』『論語孟子研究』『春秋研究』『支那文學史』『支那小説戲曲史』『清朝の制度と文學』等がある。また『君山詩艸』『君山文』はその漢詩文集である。舊藏漢籍は京都大學文學部に歸し、狩野文庫として保存されている。

¹⁶陶洙(1875-?)、字は心如、號は憶園、民國期の畫家で、山水及び花卉を描くに巧みであったと言われる。陶湘の弟で、兄と同様に藏書家でもあった。

¹⁷傅增湘(1871-1950)、沅叔は字、また淑和ともいう。雙鑑樓主人、藏園居士と號した。四川江安の人。光緒二十四年(1898)戊戌科において二甲第六名で進士となり、庶吉士に選任、散館後翰林院編修を授けられた。清末から民國にかけての教育界で重きを爲し、宣統三年中央教育會議副會

く大部ならざる丈價格は陶氏に不及こと明かにして、而かもたとへば 顧亭林孔廣森等につき 某箇人の叢書が陶氏の叢刻と重出したる折には之を捨て、若くは買ひうけたる後改めて售出の上、陶氏のものと同重複せざる様取計ふときは、目録未成なるも一萬元程度にて手に入れ得可き乎と想像致し居り候。若し外務省にして四萬元の臨時費を承諾すれば固より問題なきも、假に三萬元よりは鏹一文も出さずとせば、寧ろ之を機を失して北海¹⁸等虎視眈々たるあたりにしてやられんよりは、この方を何等かの臨時弁法によりて差しおさへおき、利子をこめて第二第三年度等より漸次支弁せば如何ならんと存居候。何れこれも目録出來次第至急奉寄可申上、豫め御了承願上候。かく申せば内地にては北京の舊書は無限にして何時にても賣り込みある可しと多寡をくくらん向もあらんが、小生の觀察を以てせば、支那の箇人に於ける藏書は既に最後期に近きたるものの如く、「底が見えた」と申す言辭が今日の適切なる表現と存候。即ち圖書館の増設により善本は次第に共有の性質を帯び、再び售買の機會なく、従て一度機會を失うときは永遠にかかる東西にめぐり合わざる虞あり。況んや研究所の基礎たる可き書籍は自ら有用の書に限られ、有用の書は即ち清朝の書と云ふも妨げなく、その清朝の書が一大批として售出せらるる機會は、今後とも甚だ多からざる可くと存候。實に小生がこの際に北京にあり、かかる機密を探る丈の交渉を支那側との間に結び得ること千載一遇と可申、たとへ將來なり如何なる人物が來平せられんとも、一には機會と、二には支那學者間に潛入するだけの因縁なくしては、到底遂げ難きこと乎と存候事、廣言には似たれども、万一内地にて北京には永遠に舊書を藏し何時にても收買し得る様空想されん向もあらんことを恐れ、一言致し候次第に御座候。御推讀の程奉祈上候。この程も燕大の圖書館を參觀致候が、昨年小生が獨力¹⁹にては買ひ難く、大學は買書の意味を示さず、百計尽きて放棄したるものが幾部も同館に收められたるを目撃致候。而して本年度は小島先生の斡旋にて、便宜も頗る多く候爲、邵晉涵の南江文鈔や張雲璈の選學謬言²⁰の如き、大坂圖書館が劍峯先生²¹の舊藏として自ら誇りしものをすべて手に入れたること亦一の快心事に有之候。塚本君六日歸平、四

長、民國六年には教育總長に就任した。傳増湘の藏儲は宋元版の富をもって知られた。また自身も校勘に勤め、一千部以上の古籍の校勘を行ったといわれる。『雙鑑樓善本書目』『雙鑑樓藏書續記』『藏園群書題記』『藏園群書經眼録』などの著作があり、目録版本學への貢獻は極めて大きい。日本との関係で云えば、李盛鐸とともに東方文化事業總委員會の圖書籌備評議員を務めた。

¹⁸中華教育文化基金會が運営した北平北海圖書館のこと。この當時すでに國立北平圖書館に合併されていた。

¹⁹原文、立を抹消の上、力に改む。

²⁰謬字は膠の誤寫。『選學謬言』二十卷補遺一卷、道光十一年孫之杲刊本。

²¹藤田豐八(1869-1929)、明治・大正期の東洋史學者で、劍峯はその號。帝國大學漢學科を卒業後、上海で羅振玉が起こした農學會に協力して翻譯に従事、また同じく羅振玉の東文學社で教鞭を執った。王國維はその時期の學生である。その後京師大學堂教習などを歴任したが、歸國して大正十二年(1923)に早稻田大學教授、昭和二年(1926)東京帝國大學教授となった。昭和三年(1928)臺北帝國大學が新設されると、渡臺して文政學部教授となり、文政學部長を兼ねたが、翌年病を得て没した。著作に『慧超往五天竺國傳』『東西交渉史の研究(南海篇)』『東西交渉史の研究(西域篇)』等がある。その舊藏漢籍は没後東洋文庫に寄贈され、藤田文庫として保存されている。

後日養病のため一時歸國の大淵氏²²と同船にて歸朝の筈に候。内地學界の御看想
さもある可しと存申候。北京の在野黨が一朝臺閣に列し、なほ且ついよいよ健在
ならんこと、在野黨のかたわれとして特に希求のみ申上候。艸々。

松浦先生文安

武四郎拜

十一日

六、昭和四年七月二十六日

敬啓、唯今啓程下津可致につき、百忙裏一筆認め申候。今回の事につき諸老先
生の絶大なる贊助を蒙り、ここに下津までに相成候こと、本懐至極に存候。生憎
陶蘭泉先生南京に在りて、直に受け渡し出来ざる由にて、兩三日焦慮を極め申候
処、濟南よりの電報にて、廿九日歸津の由分明致候間、本日午前四時陶氏令弟の
先導にて下津、明、明後兩日は書籍の點檢に費し、廿九日には徐森玉翁も下津、こ
こに正式に調印の豫定に候。陶氏方面にては金子を急ざる由につき、果して然ら
ば万一領事側の手配間に合はずとも大局には支障なかる可くと存候。徐先生の下
津は陶氏側の希望に本き候へども、書方も報酬の都合より云へば、やはり車馬費
として收めらるる上に好都合に存候。餘は天津より續写可申上候。

松浦仁兄大人文安

武四郎拜

七月二十六日午後

七、昭和四年八月七日

敬啓、上月念六北平を離れてより茲に十餘日、始めて使命の大半を盡し候に由
り、不取敢御報告に及び申候。點書廿七日より始まりて、畧々本月三日に涉り結
束を見申候。原來前回奉遞の目録は極めて粗雑にして、中には自家になきものあ
り、丟去せるものあり、重見せるものあり、加ふるに書籍の度置また序次なくし
て、檢書の困難一方ならず、殊に目録中重要な書、たとへば秘冊彙函、八旗通志、
原刻汪氏遺書の如き、誤りて書き入れたりと稱し、又はかかるものなしとさへ公
言して極力抹消を計り、殆ど讀書人の態度に非ざるものあり。遂に再び徐森玉先
生の來津をまち、如此決定致候。前回の目録は如何に誤開ありとするも、又基礎
とせずしては交渉成立せざるにより、斷乎として先方の不當なる要求を退け、た
だ粵刻念四史 目録になく 天都閣叢書 失去 許學叢刻 十三經解詁 荒政叢書 葛氏 學古
齋 金石叢書 四銅鼓齋論畫叢刻 纂喜廬叢書 鳴沙石室佚書 冒氏叢書 胡氏葆樸齋 何
夢華叢書 倭文瑞遺書 鄭小谷全集 徹居遺書 蔣侑石遺書 陸清獻全集 世補齋遺書 徐
靈胎醫書 沈氏尊生書 玉鷄苗館 以上所在不分明 石印 (?) 汪氏遺書 原刻強要したる代償
として 國初 (?) 名家詩餘 即國朝百名家詞 許鄭遺書 亦稱趙氏峭帆樓 萬密齋遺書 即万氏遺

²²大淵忍爾 (1912-2003)、道教史研究者、東京大學東洋史學科卒業、岡山大學教授。著に『敦煌道經目錄篇』『敦煌道經圖録篇』『初期の道教』『道教とその經典』等がある。

書十種 甘肅(?)通志 特に先方の希望により を除き、其他の全部を譲受することとし、而かもこれ丈の代償として、小生の私見ながら瓦礫を捨てて珠玉に替ふるの目的の下に、校礼堂全集 凌廷堪完本 西莊始存稿 西泚居士詩文集 王鳴盛 十經齋文集 柴辟亭詩集 沈濤 夢陔堂詩文集文說字詁義府合按 黃春谷 詩觀 初二三集 鄧孝²³儀 潘氏叢刻 中に潘功甫の東津館文集あり 洞簫樓紀 碧雲齋 樂府餘論 宋翔鳳 塩邑志林 天啓刊本 を要求したる処、幸にして其の認容を得申候。就中詩觀の三集本を要求したるとき、先方も少からず狼狽の色あり、遂に筆を執りて可の一字を書したるは痛快淋漓たるもの有之候。なほこれらの書中、秘冊彙函 珠叢別録 蘇齋叢書 粵刻通志堂 潘刻五種 十六家墨説はこれも目下自家になきも、北平にて購補の見込あり、誦芬室初二集 續古逸叢書 積學齋 鄒齋 懷幽雜著 隨庵 正續 鳴沙石室佚書 宸翰樓 吉金石齋 玉簡齋 雪堂 雲笛 等の新刻影仿の諸書は、本人の切なる希望により替ふるに普通本の紙質佳良なるものを以てすることとし申候。裝書は始め自宅にて行ふこととし、中ごろ三井洋行の倉庫に豫定を變じ、三度自宅に變更を要求し、困難を極め申候が、時日だけは一步も假借せず、約束の二日より開始して、五日間にして昨日夕刻に至り、見存の書共貳萬六千九百八十五本を一百八十八箇の木箱に分装を完了致申候。この間三井洋行に於ける千田氏が後方勤務として木箱、包紙、油紙、鉄條、マーク及び人夫につき周到且つ迅速なる手配を遂げられたると、水野君が十日の辛苦にあたり全く獻身的熱誠を以て手足の如く活動されたることは特筆大書す可きものある已と存候。裝了の木箱は陶氏の自動車々庫に藏し、本日 先方の言を信ぜば 英租界なる金城銀行、後通成貨棧に押款の形式を以て納め 陶氏の住せるは特別區なるにより支那官憲干涉の虞あり、その收條を小生まで交付する約束に候。經費に就ては領事館に達したる外務省の公文はすべて未決定の如く曖昧を極めたる文面なるにより、白井副領事も貴下の套數本數の精査を待たずしては打電し難しと稱し、漸く一日に至り大体の本數を得たるにより、之を以て打電を請ひおき候ところ、一昨晝に至り返電として書價三万一千元電送ス可シと申越し候よし、よつて到着の上は小生より三萬元を陶氏へ手交し、陶氏より三万一千元の收條をとり、小生は陶氏へ一千元の收條を交付し、後一千元を徐先生に奉送することに手順を整へおき申候。なほ陶氏の僕從その他、點書に應援したる人々には、特に徐先生の注意により、三百元を与ふることとし、これは雜費として支出を請ふことに、既に領事の理解を求め申候。保險及び運費はすべて領事館に一任し、人夫の費用及び用度類はしばらく三井洋行より代償することに致居り候。よつて小生の殘務としては通成貨棧の收條を領事館に交付することと、現金三万一千元の始末を定め、並に三百元を陶氏を経て交付することのみと相成申候。本日三井洋行及び領事館に出頭して、それぞれ報告と共に通関運送の事務を擧げてこれらの人々に委託の筈に候。今夜は關係者諸氏を招いて會食を催し、聊か謝意を表し度とも打算致居候。殘務相濟み次第歸平可致候、詳細の報告は後日に期し居候。 狩野先生はじめ各位にもよろしく御致声奉願入候。

²³ 誤、正作漢。

八月七日 倉石拜

松浦先生文安

次に桑原先生²⁴御病氣の由、吉川君より傳聞致し心痛罷在候が、其後の御經過如何に候や、御承知の御模様御序に御知らせ下されまじく候や。日前陳援庵先生²⁵に面晤の折、桑原先生の安否を尋ねられ候間、病中の旨申候処、いたく心配され、是非最近の病状を尋ね呉れと申され候。若し病少しく癒るの日、陳氏のこの語を桑原先生に傳ふ可き方法もあらば何よりのことと存申候。筆序での如くなれど、併せて奉願上候。

八、昭和四年十月五日

敬啓、屢々雲箋御惠投を辱くし乍ら、筆遅にのみ打過ぎ申訳も無之候。陶書も漸く到齊の趣、安堵の事に候。尤も御精査の結果如何の御批評ありや心許なく存候。殊に第二批は今だ整はず、徐先生も殊に憤色有之候。暫時御待ち下され度奉願入候。次に申遅れ乍ら、天津千田氏へは別に物品の謝礼は致しをらず、同氏及び洋行中の倉庫係を招きて會食したるに過ぎ不申候。金圓はすべて同氏個人として貸與せられるままに係り申候が、これは既に天津領事館より返済したることと存申候。來薰閣陳濟川、明日南嶺丸にて東渡。八木氏の東道にて先ず福岡に到り、同道の做套工人を井上氏にあづけ、然る後京都へ直行致度由申候。可然御幹旋の程、替つて奉願上候。なほかねて來薰閣まで御送附の研究所用紙數枚は何の用をなすものか、本人も不分明の由申居候間、御面晤の節直接御告げ下され候はば幸ひに存申候。此頃林昌彝の三礼通釋、白紙四十六本、四十五元、手許に扣留致しおき候が、若し京都になくば研究所にて御購入ありては如何にやと存候。性質は五礼通考とほぼ同様に候。同人の著述零碎なるものは小生も數部集め、なほ集め度企畫致居り候へども、これは大部にて聊か手におへ不申、かくは御無心申上候次第に御座候。人物も陳壽祺の門人にて、隨筆等 射鷹樓詩話 硯鞋緒錄 海天琴思錄 温經日記 はなかなか趣味有り候。目下學校開講の直後にて多事を極め居り候間、一筆のみ認め申候。餘は後時に譲り申候。

武四郎拜

²⁴桑原隲藏(1871-1931)、東洋史學者。帝國大學漢學科卒業後、第三高等學校教授、高等師範學校教授を経て、二年間の中國留學後、京都帝國大學教授となった。大正十二年(1923)『蒲壽庚の事蹟』で帝國學士院賞を受賞。昭和五年(1930)停年退官したが、翌年病を得て死去した。『桑原隲藏全集』全五卷附別冊がある。

²⁵陳垣(1880-1971)は廣東江門の人で、民國期の歴史家、援庵はその字。青年期には報國救民思想に燃えて政治に志し、革命後衆議院議員となったが、まもなく北京に移り教育と學術に専念した。1921年には教育次長、1926年にはカトリック輔仁大學の校長となり、新中國成立後、輔仁大學が北京師範大學と合併した後も、引き続き北京師範大學校長に任じた。また中國科學院歷史研究所第二所の所長も兼ねた。その書齋を勵耘書屋といい、勵耘老人と自稱した。中國史上のいわゆる夷教の研究の開拓者として著名なほか、『二十史朔潤表』『中西回史日曆』『史諱舉例』『中國佛教史籍概論』など中國史學におけるスタンダードワークを數多く送り出した。

十月五日

松浦先生文安

九、昭和四年十一月二十八日

敬啓、北京も愈々雪天と相成り、二年前の景況殊に忍ばれ申候。茲に豫ねて御猶豫を乞ひおき申候陶書第二批愈々結集を遂げ申候に就ては、別紙目録の通り 套數ありて本數なきは、精査したる記事を紛失したるにより、止むなく入箱の際の心覺えに依り申候次第 近日發送可致候間、何卒御檢收下され度、小生明日公使館に出頭、証明書請求、然る後通運に托して全く前回同様の手續を以て神戸まで運ばせ可申候。箱數は煙捲箱子二个、その約三分之二大なる箱子一个に候。ここに一つ折り入て御諒解を願ひ度は、濱田教授²⁶來平の砌、大學の爲に購入されたる書籍等一箱、これも荷造り濟みの所、証明の方法に就き水野君いたく當惑され候につき、権宜の処置乍ら、今回の証明に添へ、公使館よりは四个として 公使館には内情申し出さず候 發送致度候間、貴兄なり濱田教授なりより、狩野所長に箇人的問題として御允許を乞ふ様御取計らひあり度奉願上候。なほ發送の際は、重ねて御報告致し可申候。先は當用のみ申上度、如此に御座候。

松浦先生文安

武四郎拜

十一月念八

通志堂經解 六十套 四百八十本
秘冊彙函 八套
蘇齋叢書 四十二本
珠叢別録 四套
續古逸叢書 十套
十六家墨說 二本
潘刻五種 六本
積學齋叢書 卅二本
隨庵叢書 二十四本
同續編
鳴沙石室遺書 一套
宸翰樓叢書 一套
吉金齋叢書四集 二十四本
雲窗叢刻 一套

²⁶濱田耕作 (1881-1938)、號は青陵。考古學者。東京帝國大學で美術史を専攻、卒業後やがて京都帝國大學の講師、助教授となり、ヨーロッパに留學。考古學を學んで歸國後、京都帝國大學の初代考古學教授となった。昭和十二年 (1937) 京都帝國大學の總長となったが、在任中に死去した。昭和六年 (1931) 帝國學士院會員。『濱田耕作著作集』全七卷がある。

玉簡齋叢書 二套
 雪堂叢刻 二十本
 懷幽雜俎 一套
 誦芬室初編 八十五本
 同 二編
 中吳紀聞 二本 皇朝類苑 十二本
 元典章 十八本 元音 四本
 中州集 四本 金臺集 二本
 鐵崖先生古樂府 二本 鐵崖先生詩集 二本
 張蛻庵集 一本 江東白苧 二本
 梅村家藏稿 八本 讀曲叢刊 三本
 盛明雜劇 十本 傳奇四種 八本
 五代史平話 二本 剪燈新話 三本
 醉醒石 二本
 以上一十九種

十、昭和五年一月二十四日

敬啓、年頭の御祝辞目出度申納め候。推行國曆の第一年とは申せ、脳筋丈舊にして陰曆までは新禧も口にのり申さず、旁々遲疑茲に至り候こと申譯無御座候。愈々今年こそは如何に藻掻くとも歸朝せねばなり不申、年頭乍ら懽然たるもの有之候。貴家に於ては御歸所第一の新春とて、嘸かし御感慨の御事と遙察のみ申候。歳末には御迷惑千萬なること奉託致し候処、早速親しく御調査を煩はし深謝申上候。よりに常山貞石志は直に退回、西莊始存稿の抄写費が浮き候と同時に、木犀軒を背負ひ込み申候。陶書第二批未だ到着致さず候や、懸念の至り、到神の上は同地より貴研究所宛葉書にて御通知申上ぐる手筈に致しおき申候。第一批中の缺書地志四種は、小生 特に書庫中より搜出したる記憶ありただ此の書総名なし。他部に紛れ易く候が、若し「同治癸酉江蘇書局刻の元太祖親征記」をめあてに再調なし下されまじきやと希求のみ申候。叢書書目等に習見する地志四種とは全然別今念のため申添へば親征記以外に何々の三種を合せしや今は記憶致さず候百三名家もこれは装書に際して急に他より工面したる品にして、當時一百本の數を誦して授受したるもの、欠一本とはこれも聊か受取難し、或は帙なき爲装書の便宜上箱の隅に一二本づつづめに用いたる因果にて、遂に遺失したるものか、とにかく申訳なき仕儀として深く引咎致す所に御座候。近く年度の改まると共に、研究所も人物に藏書に新機軸を出されることと期待致居候。天機若し可洩、その一端なり御示知に預かり度存候。内地の學界が沈滞に陥り易きは豫ねての大札にても御同感申上候処、若し之に起死回生の靈劑を調せんと思はば、愚見を以てすれば支那の讀書人を招くより外に途なくと存候。尤も第一流の學者は容易に韜晦を肯ぜず、殊に所謂紅頂子の教授に在りては、驚く勿れ月收壹千元に達するものあり、日本人の

考ふる如き教師の収入に目がくれて東渡する如きは思もよらず候。これらの人々は若し日本にて禮を厚うして毎年一人位宛を二三月聘して指導を乞ふより外に方法なく候。ただ研究院程度の青年學者に對し、相當以上の禮を以て之を招かんか、翩然として東渡するもの、蓋しその數尠からざるものあらんと存候。若し研究所が指導者と云はんよりは、研究員を日支兩缺としてひろく人材を求めんか、譬へば清華研究院出身諸君子の如き、能く我が學界に清新の空氣を注入す可きあらむと存候。蓋し北京の學海を見るに、實に大教授の横行時代にして、たとへば東京に於けるが如く、某々科の講義は全く何れの學校を問はず某々氏の專賣と定まり、學生も亦主任を督して必ず某々氏を聘せずしては已まず。從て薪水は全くかかる大教授に吸収されて、研究院出位の人々はたとひ出頭の機ありとするも、多くは旋ち打倒さるる現状に有之、竊に怏々の胸を抱きて出洋の機をまてるもの比々として、是れ出洋は即ち彼等の養資格の唯一條件たるものにして、取りて以て我學界の改新に寄與せんか、一舉兩得正に是之謂也。これ深く具眼の士に望みて已まざる所に候。御高見如何に御座候や。九州大學の楠本君²⁷、支那文學科の教授を支那より聘し度畫策し、西洋學の諸教授よりは大に支持を受け乍ら、東洋史でふ方面の不賛成にて行き悩み居候。この頑冥者流之を有北に投げむ術はなくやと浩歎致居候。書肆の要賬門前成市候にて擱筆致候。愈々御自愛のこと遙に奉祈上候。

武四郎拜具

一月廿四日

松浦學兄文安

附一、昭和四年十月九日來熏閣陳氏致松浦嘉三郎信札

謹啓、三日呈上一函、諒蒙

台覽、弟于五日與八木先生同船來門司、于八日下午十時到著、即宿在一旅舎中、擬定今日九時赴福岡少滯、即赴京都。做書套工人同來、此行交與井上先生、請他管理此事也。塚本先生書箱十件、弟攜來由南嶺丸船員運神戸、今晨已與塚本君打電報、請他到神戸去取。弟約在十五左右可到京都、謹此先寄奉聞、餘容會面詳談、惟希諒鑒。 此上

十月九日

杭拜

松浦先生

²⁷ 楠本正繼 (1896-1963)、號は剛堂、中國思想研究者。東京帝國大學支那哲學科卒業、九州大學の中國哲學史教授を務めた。著作に『九州儒學思想の研究』『宋明時代儒學思想の研究』等がある。その所藏漢籍は國土館大學に歸し、楠本文庫として保存されている。

附二、倉石武四郎發往松浦嘉三郎電報

日付：昭和四年六月十九日聖護院局着信
宛名：キヨウトテイコクダイガク ブ チンレツクワンナイケンキウシオ」マツ
ウラカク^マロウ
（京都帝國大學 文 陳列館内研究所 松浦嘉三郎）
電文：三マンナリ ソウトウトミトム クラ
（三萬なり、相當と見込む。倉。）

附三、狩野直喜發往松浦嘉三郎電報

日付：昭和四年七月十二日聖護院局着信
宛名：ヨシダマチ」キヨウトテイダイ ブンガクブ チンレツカンナイ トウリ^マ
ウブンカケンキユウジヨ」マツウラカサブ^マロウ
（吉田町 京都帝大 文學部 陳列館内 東方文化研究所 松浦嘉三郎）
電文：シヨセキ カフコトニ キマツタ 一四ヒアサ カエル カノ
（書籍、買ふことに決まった。十四日朝歸る。狩野。）

附四、倉石武四郎發往狩野直喜電報

日付：昭和四年八月二十五日聖護院局着信
宛名：キヤウトシカミキヤウク タナカオホイマチ」カノナホキ
（京都市上京區田中堰町 狩野直喜）
電文：二〇ヒ カンレイマルニツム ウント^マンサキ クラ
（二十日、南嶺丸に積む。運賃先。倉。）